



プロローグ



「よいしょ……つと」

一人の少女が、足元に散らばった本を拾い上げていた。

少女の周りはかなり悲惨な状態であり、床にぶちまけられた本の数々は、まるで巨大な地震に襲われたかのようだ。

本来ならば赤い絨毯が見えているはずの床も、本で埋もれて見えないような惨状であった。

「……これ全部元に戻すのに何日掛かるんだろう」

少女はため息交じりにそう呟きながら頭上を見上げると、天井までびつしりと積み上がった本棚が聳え立っていた。

一つの本棚の高さは人の背丈の数十倍は優に超えており。そんな本棚が何百、何千と並んでいるのだ。

ここは普通の書庫なんかではない。紅魔館こうまかんと呼ばれた大きな洋館の地下に存在する巨大な図書館であった。

紅魔館自体それなりに広い屋敷なのだが、地下に併設されたこの図書館は館の面積を遙かに超えているのである。

そして、この管理を任されているのが、本を拾い集めている赤い髪の少女——小悪魔の『こあ』と呼ばれた少女である。

少々風変わりな名前だが、これは彼女の主人が付けたものであった。

主人の名前は『レミリア・スカーレット』という。こあが何百年も世話をしている吸血鬼の少女だが、少し前からその世話係を「あるメイド」に任せ、今ではこの図書館で司書をしているのだ。

こあは再び上を見上げていると、周りではたくさんの何かの本を抱えて飛んでいる姿が見えた。それは、館で働く妖精メイド達であった。

普段はほとんど館の方に向いている妖精メイド達だったが、今はこの無数に散らばった本を片付ける為にせっせと働いていた。

こあの視線は妖精メイド達が飛んでいる先——つまり、この図書館の天井をじーつと眺めていた。そこには本来、普通の建築物と同様に天井があるはずなのだが、現在はまるで何かに刳り貫かれたような大穴が空いていたのだ。

その大穴は地上の館をもぶち抜いており、普段では絶対に入り込む事の無い日の光が差し込んでいた。

おかげでいつも薄暗い図書館は明るくなり、普段よりもずつと風通しが良い。

普段から少々カビ臭い図書館にとっては、滅多にない空気の入れ替えとなっていた。

そして、この大穴が空いているのは天井だけではなく、なんとその真下にも同様な穴がぽっかりと空いていたのだ。

本来ならば四角い箱のような形をしていた図書館は、見事に部屋の中心部をくり抜かれている状態であった。

一体、どうしてこんな事になってしまっているのか？

詳しい事は省いてしまうが、不幸な事に一晚で二回の襲撃に遭ってしまったからである。

最初は招かれざる来訪者二名によつて一部の本が滅茶苦茶になつてしまつた。だが、その時点では天井に穴なんて空いてもいいし、ここまでの被害は出ていなかった。

——問題はその後である。

来訪者達の騒ぎに気付いた身内の一人の暴走によつて、天地に大穴が空き、その衝撃で本棚に収納されていた本が大量に落下してしまつたのである。

こあがこの惨状を目の当たりにした時には、さすがに意識が遠のいてしまひそうになつたという。

こあは他の妖精メイド達と同じように、淡々と本を拾い上げては本棚に仕舞つていく作業を繰り返していた。

(本の片付けも大変だけど、あの大きな穴も塞がないといけないのよね……)

そんな事を考えながら片付けを進めていると、こあは床に散らばつた本に躓いてしまつた。

「ぎやつ!？」

こあは咄嗟に目の前の棚板に手を付いて転倒を免れたが、全体重を乗つけた衝撃は本棚に伝わり、こあの頭上に突然影が落ちてきた。

「むぎゅ!？」

直後、こあの脳天に衝撃が走つた。

そして次の瞬間、バラバラと頭上から雪崩のように本が落ちて来ると、あつという間にこあは本の中に埋もれてしまつたのである。

周囲には埃が盛大に舞い上がり、一瞬にして本の山が出来上がつてしまつた。

やがて、山の先端からこあの頭がひょっこりと出てくると、トホホと言いたくなるような気分であつ

た。

「うんしょつと……」

本の中から這い出たこあは、服や髪に付いた埃を叩き落としていると、再び頭上から何かが落ちてくる気配を感じ、思わず両手を上げた。

「キヤッチー！」

またもや落下してきた一冊の本を今度はしつかり受け止めると、こあは安堵の息を漏らして落下してきた本を確認した。

「あつ、これは……！！」

こあが受け止めたのは紅い本であった。

他の本とは違い、大した装飾もされていない地味な装丁だが、数百ページにも及ぶ厚手の本だった。

その表紙には『スカーレット・クロニクル』と金色の文字が刻まれていた。

「こつちに来て失くしたと思っていたのに、まさかこんなところにあつたなんて……」

その名の通り、これは主人であるスカーレット家の年代記である。

ただ、年代記とは名ばかりで、実はこあが直筆している日記のようなものであった。

この年代記は他にも何冊かあるのだが、いつの間にか全てどこかへ消えてしまっていた。

こあは何度か探したものの一向に見つからずに半ば諦めていたのだが、まさに棚ぼたとはこの事を言うのだろう。

「なんで他の本と一緒に紛れ込んだんだろう……？」

自然と本を捲り始めると、幻想郷にやつてくるずっと前からの出来事が記述されていた。

「懐かしいなあ……まだこの時は、三人しか居なかつたんですよね」
こあは本の片付けをすっかり忘れ、引き込まれるように本のページを捲っていったのであった。